

加藤辨三郎 述

歎異抄

11

文責 本誌編集部



本願に伴う念佛

親鸞聖人は、法然上人によって、はじめて本願の教えに接しました。われわれ一切衆生は、上もなく、下もなく、上の上はもちろんであるが、下の下も、みんな平等に救われていくのです。それは如来の本願で救われるのです。その救う力は、如来の本願という無限の力にあるのです。われわれは、その無限の力に乗せていただければいいのです。

この本願の教えに出会った親鸞聖人は、豁然^{かつぜん}とお悟りになったとおわれます。そこで念佛ただ一筋にお入りになられました。もはや、念佛を何遍称えなくてはならないとか、ああしてはいけない、こうしてはいけないといったようなことは、一切なくなつたのです。それで、親鸞聖人の教えは、信心に尽きるといわれているのです。

その信心は、必ず念佛を称える信心です。なぜかといえ、念佛を称えよ、念佛を称えるだけで、間違ひなく悟りを開くことができると、阿弥陀如来は、かたく御約束をし

てくださっているからです。これが弥陀の本願です。ゆえに念佛を称えることが本願に伴っているのです。念佛を称えないのでは、本願が本願になりません。

『教行信証』の教巻の最初に『大無量寿経』は真実の教と書かれています。それは『大無量寿経』が、本願を説く根本の趣旨を説いているからです。その根本の趣旨、つまり念佛を称える親鸞聖人の信心は、如来の本願によって、如来から賜った信心です。その信心を親鸞聖人は「信樂」というお言葉であらわしていられます。「信樂」とは、本願そのものにある「至心信樂」の言葉を使われているのです。この「樂」は喜ぶの意味です。信じ喜ぶのです。信心は信心、歓喜は歓喜ではなくて、信心歓喜で、信心をいただくことは、同時に喜びをもいただいているわけです。「至心信樂」は、『教行信証』の信巻の標語になっています。そしてその標語の下に「正定聚の機」と書かれています。これは正機です。第十八願の信樂とは、つまり如来の信心をこちらへちようだいたした人、如来から信樂をいただいた人です。その人は必ず念佛を称えているからです。そういう人こそが正定聚の機です。正定聚の機とは、必ず大般涅槃を超証することができる人なのです。

親鸞聖人は「極樂」という言葉はあまりお使いになりません。もちろんときにお使いになっていますが、極樂というところが、大涅槃とか、無上涅槃とか、大般涅槃とか、最上級の言葉で涅槃の境地を説かれています。お釈迦さまは、三十五歳のときお悟りを開かれました。そのときお釈迦さまは、自分は涅槃を得た、そして佛になったとおっしゃいました。佛になることは、涅槃を得ることです。すなわち悟りを開く。それは真理を悟ったことであります。この意味があつたのでしょうか。親鸞聖人は、『教行信証』では、一貫して涅槃をお説きになっています。本願を信じ、念佛を申す者は、正定聚の位につかせていただける。それで間違いなく大般涅槃を超証すると説かれています。

知らずに行う悪

このようにして親鸞聖人は、一点の疑う余地もなく、念佛を称えて深く信心に入っていました。それにもかかわらず、「かなしきかな愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して……真証の証にちかづくことをたのしまず」といって、恥ずべし、傷いたむべしと、ほんとうに悲しんでいられるのです。

その意識が、『歎異抄』では「罪悪深重、煩惱熾盛」と説かれているのです。だが、煩惱熾盛は、じつは罪悪深重なのです。むしろ罪悪深重だから、煩惱熾盛だとさえないっていいではありませんか。とにかくわれわれの心の本性の底には、すぐに悪に陥る、あるいは悪に親しむような素質があるのです。

罪悪には、重いか軽いかという見方と、また浅いか深いかという見方があると、金子大榮先生は説いてくださいました。重い罪か、軽い罪かなどと、われわれの道德の世界、常識の世界は、罪を重い軽いで論じています。しかし宗教的な見方には、もう一つの見方があります。それは、知っていてやる悪と、知らずにやる悪とがあるのです。そして、知ってやる悪のほうが深く、知らずにやる悪のほうが浅いようにおもいます。しかし、そうではないようです。知らずにやる悪ほど深い悪はないのです。知ってやる悪は、叱っておけば、まだ直るかも知れません。しかし知らずにやる悪となると何をやるかわからないのです。

ところが、意外にわれわれはこの悪を犯しているのではないのでしょうか。自分はすこしも悪いことをした覚えがないが、結果的には悪いことになっているような事態に至っ

ているのです。戦争なんかそうではないでしょうか。戦争をはじめめる人は、すべてを知り尽くして戦争をやっているのではなく、知らずにやっているようなことがたくさんある、あるいは誤解をしてやっていることがあるのではないのでしょうか。知らずにやっているのは、底の知れないものがある。これは非常に深い悪です。

大慈悲心の発露

そう考えた場合に、親鸞聖人の仰せになる罪悪深重の意味の深さは、われわれが常識的に考えているほどではない、場合によっては常識と反対に見えるが、しかしそれぞれが一番深い罪悪であるという点、これを親鸞聖人は非常に深く省みておいでになったのではないかと思われれます。そのことをここに、「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という非常に簡潔な言葉で説いておいでになるのであります。

しかし法然上人の思想は、「悪人なおもて往人をとぐ、いはんや善人をや」、親鸞聖人は「善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」と、こう反対になっているという人があるわけです。法然上人の門下のなかにも、善人はも

ちろん、悪人さえも助けしてくれるのだから、本願はありがたい。だから善をするほどいいと、悪を退け、善を努める思想を鼓吹していたお弟子さんがいたのです。常識の世界ではこれが普通です。だが『教行信証』を拝読しますと、どうしても「善人なおもて往生をとぐ、いはんや悪人をや」でなくては親鸞聖人の思想にもとることになるのです。また、「世のひとつねに」、一般の人は簡単に、「悪人なを往生す。いかにいはんや善人をや」というのが常識派のおもわるるところだが、よくよく考えると、これは本願他力の教えに背いているのです。

本願他力とは、どのような教えでありましょうか、それは一切の衆生を救うのです。なかでも、十悪五逆の悪人こそ、もっとも救わずにおけない、それが大慈悲心の露露です。阿弥陀如来が、本願をお立てになった根本の精神は、その大慈悲心にあつたのです。善をしたらよろしく、悪をしたら駄目だというではありません。悪をしたことも、いわゆる業縁の催すところであつて、凶らずも悪を行ったのです。考えてみればかわいそうなものです。それゆえにこそ、救わずにはいられない、それが本願であり、如来の御慈悲というものでありましょう。

なぜそういうか。そこには「自力作善のひと」ということがあります。つまり悪いことはひとつもしません。いいことはどんどんやることのできる。そういう人を自力作善の人というのです。自力作善の人は、本願をたのんではいけません。ひとえにお助けくださいという気持ちがないのです。わたしは善をして、その功績によつて自力で合格できるといふのです。これは弥陀の本願をひとえにたのむ精神ではないのです。もっといえば、弥陀の本願を疑っている。弥陀の本願の限らない力を疑っている。そして自分の力を信じている。自分には悪を退けて善を行うことが徹底してできるかのようにおもひあがつていふのです。すくなくとも本願他力には背いている、おもひ違ひをしていると親鸞聖人は仰せになっています。

だが、弥陀の本願に背いたから、お救いがないかということ、そうではありません。もしその人たちにお救いがないというのであれば、弥陀の本願に限りがあることとなるのです。しかし弥陀の本願はそういうものではありません。あなたが、自力、自力といっているが、ひとえに本願を信じ、念佛を申すことに気づいてくれれば、それでお救いになるのだと説かれています。「しかれども、自力のこころ

をひるがへして、他力をたのみたてまつれば」と、如来のほうは、どこまでも凡夫を捨てないのです。一旦背いているものも、何とかして、待ってくださっています。そのうちに気がついて、いや、この自力ではいけませんでした、本願を疑っているのがわかりました、そう気づいてすぐ自力を捨て、他力本願をたのめば、もうやすやすと救ってくださるのです。

煩惱具足の凡夫

そうして「眞実報土の往生」と書かれています。この眞実報土の往生を、親鸞聖人はいつもお使いになつていられます。これはいわゆる浄土往生、あるいは極楽往生です。

しかし親鸞聖人は、もっぱら眞実報土とお説きになります。報土とは、本願が報いられる場所です。本願が報いられた、本願が成就してそこにあらわれ出た境地です。この境地が大般涅槃界で、涅槃の世界なのです。

そこへ往生することであるが「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざる」であります。煩惱熾盛とは煩惱が盛んなことです。煩惱具足は、どんな煩惱もそろっていることで、これは灰になるまでも

捨てられない身であつて、われわれの現実なのです。

こういうわれわれであれば「いづれの行にても生死をはなるることあるべからざる」、どんな行をしたところで、悟りの境地のようなものはできないのです。そんなわれわれをあわれんでくださつて、如来は本願を起こして、念佛を与えてくださつたのです。ですから、弥陀の本願は、智慧の方からいえば、佛の無限大の御智慧のしからしむるところです。慈悲からいえば、無限の慈悲をもって本願を立ててくださった行の道であります。

煩惱具足で、わたしたちは呼吸している間じゅう煩惱から離れられないのです。それを知りとおして如来は、本願を信じて念佛を申しなさい、さすれば臨終一念の夕べには、必ず大般涅槃を超証することができると教えてくださっているのです。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と『歎異抄』の終わりに出てきますが、親鸞聖人は、この親鸞を目当てにして、阿弥陀如来は本願をたててくださったと受けていられます。それを信じていられるからこそ、あの力強い、安心し切つた、徹底した親鸞聖人の本願念佛の生活があるのです。